

9) PMD成人患者に院外活動を試みて

国立療養所再春荘

境	恵美子	有	水	モモ代
宮	本嘉子	米	丸	瑞子
竹	内千代子	池	本	勝子
高	峯揚子	青	木	菜穂美
桜	井キヌヨ	平	山	節子
佐々木	昌子	東		豊子

当荘においては、患者の自主性を養う目的で患者自治会主催で、院内活動として、ショッピング、レクリエーションを実施している。介助は主に職員で、他数名の家族の参加を得ているが、患者の病状の進行に伴う介助者不足不測の事故発生時の責任問題が生じて来た。この解決策の1つとして患者、家族、職員の院外活動に対する意識調査を行なったのでここに報告します。

<調査対象及び方法>

患者総数36名、家族総数34名、職員総数30名で、方法は記述式アンケートにより行なった。

<調査結果>

回収率は患者、職員共100%、家族は68%で2名は宛名不明で返送があった。最初に、院外活動の必要性については、患者、家族、職員のほとんどが必要と認めている。患者から家族への呼びかけについては、実際に連絡した者としなかった者が50%で、家族は連絡をうけたと答えた者48%、うけていない者52%であった。

今まで家族が参加したかどうかについては、家族の参加があったと答えた者となかったと答えた者共に50%で、家族は参加したと答えた者43%、しなかったと答えた者57%であった。家族の参加の必要性については、患者は67%、家族は62%、職員は100%必要であるとしている。今後参加出来るかとの家族への問いには参加出来るとした者が74%、出来ないとした者18%、無回答8%であった。家族の参加のない患者をどうするかについては、職員の介助で行くとした者が、患者42%、家族が91%、職員40%で、病棟に残るとした者が患者22%、家族4%、職員43%であった。

事故が起きた時の責任をどうするかについては、患者会が持つとした者が、患者11%、家族43%、職員33%、本人とした者が、患者58%、家族13%、職員3%、病院側とした者が患者19%、家族17%、職員3%であった。職員に依頼して事故が起きた時の責任をどうするかについては、問うとした家族が15%、問わないとした家族78%、その他7%であった。

<考 察>

家族の26%の未回収率は、平素の面会状況と合せて、無関心ではないかと思われる。患者、家族職員共に97%が、院外活動を必要と認め、それだけ楽しみにしている事がうかがえる。家族への呼びかけについても、親の老令化、親、兄弟への遠慮の為にか、半数が呼びかけをしている。

又、今後は参加出来るとした家族が74%もあったことは、思わぬ収穫であった。又家族の参加の

ない患者をどうするかについては、家族としては、職員の介助でも行かせてあげたいとの気持ちがうかがえる。職員は、家族の自覚をうながす為にきびしくする必要があるとの考えで43%が病棟に残すとしている。

事故責任については、患者、家族共に病院側にあるとした者があり、又依頼して事故が起きた時責任を問うとした者が15%もある事は、今後この点について考えていく必要があると思う。又、家族がついて行くのが最良の対策であるとの家族の意見もあった。

<おわりに>

この結果を基にして、今後は、患者、家族の指導を行ない、連絡を密にしてより充実した院外活動にしたい。又、責任問題については今後も、患者、家族、職員が一体となり考えていかなければならない問題であると思われる。

10) 当病棟で求められる看護婦像

国立療養所再春荘

田 辺 豊 子	竹 田 加 代
吉 安 さよ子	亀 田 日出子
田 代 節 子	田 中 嘉 子

<はじめに>

障害が進行し、ほとんどの患児が歩行不能者となり、年令的にも中学生、高校生となった現在種々な問題が出て来ている。この期に今までの看護をふり返り、今後筋ジスはどの様な看護が必要なのかを知るためにこの研究に取りくんだ。

<目 的>

患児の看護婦に対する意識調査をすることにより看護という仕事をどの様にとらえ又、どの様な看護婦を求めているかを知る。

<研究方法>

対象 中学生16名、中学部卒業生9名、アンケートと面接による意識調査、

<結果及び考察>

アンケート回答率60%、特に中学卒業生の回答が少なかった。

- ① 看護婦のイメージ、白衣、キャップ、病院トイレ、清潔、おこる人等。
- ② 看護婦の仕事だと思ふことを書いて下さい。
 1. 身の回りの世話。
 2. 診療の介助。
 3. 相談相手。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

当荘においては、患者の自主性を養う目的で患者自治会主催で、院内活動として、ショッピング、レクリエーションを実施している。介助は主に職員で、他数名の家族の参加を得ているが、患者の病状の進行に伴う介助者不足不測の事故発生時の責任問題が生じて来た。この解決策の1つとして患者、家族、職員の院外活動に対する意識調査を行なったのでここに報告します。